

が必要であることを覚えておかねばなりません。

お互いのために、温かい思いやりとしてコンドームを着けることが、今や時代に即した“ファッションブル!!”であるような風潮を、是非醸し出してもらいたいものと願っています。“パパ・シャツ”という言葉で無粋な下着も流行したとのことなので、コンドームも“ベニ・シャツ”と言って、はやらせたらどうでしょうか。コンドームを使うことは、今や“思いやりのある男らしさ”の証しといっても良いのです。

●ピルは本当に性感染症に関係ないのでしょうか？

よくピルは避妊のためのホルモン薬剤であり、服用したことで性感染症に罹りやすくなることはない、性感染症流行とは関係ないと言われています。

ピル服用により、子宮頸部が感染し易くなることはなく、かえってクラミジア感染が子宮の中深く侵入し難くなり、骨盤内感染症発症を低くするとさえ言われています。

しかし、実際は、ピルの中に含まれる女性ホルモンで、局所の感染反応がおさえられ、感染による自覚症状の出る割合が低くなり、骨盤内感染症に広がっているにも拘わらず、あまり自覚症状が出なくなるため、それと気づかないようになることが、最近の研究で明らかになっています。この研究が殆ど無視されて、骨盤内感染症が少なくなるというのは不

思議でなりません。ピルの研究者の人達は、あまり感染症関係の論文を読まないからなのでしょうが？

●ピルで避妊出来ると安心して、避妊のために使っていたコンドームを使わなくなる可能性はありますか？

性感染症のことをあまり心配しない人達は、ピルで妊娠の心配がなくなったので、コンドームからも解放されたし、安心だからといって、より自由に積極的に、性交渉を持つようになりはしないかと心配もされています。そのようにコンドーム使用率が下がり、しかも性の自由化が、より進む結果として、ただでさえ、現在流行している無症候の性感染症群が、さらに大きく広がりはしないかと、かなり心配されています。

その心配のため、厚生省によるピルの解禁も遅れたと言ってもよいわけです。本当にその心配はないのでしょうか。しかし、性感染症の怖さをピルを服用する人に充分啓発すれば、その点を皆自覚して避妊は避妊として、性感染症感染予防にはそれなりに、コンドーム使用に心がけ、気を付けるから、そんな心配はしなくても大丈夫という主張が通って、ピル解禁になったのです。ピルを服用する人達がこのことを充分わきまえた上で、本当に自分の健康を守る為に性感染症予防に心がけてもらいたいものです。

ピルもコンドームも —コンドーム使用は“本当の愛のあかし”



ピルとコンドームが一緒に包装された製品

ここまで説明してくると、避妊のためにはピル、性感染症予防のためにはコンドーム、両者の併用こそ、性の健康を傷づける“性の影”から身を守る、唯一の方法であることがわかりただけだと思います。

パートナーを愛しているから、信頼しているからといっても、“愛や信頼”では性感染症は決して防げないことをよく覚えておいてください。

事実、ヨーロッパのピルには、左図のようにコンドームと一緒に包装したのも発売されており、日本も是非見習ってほしいものと感じています。

勿論、完全に安全な人同士のセックス以外は慎めと、主張する人もいます。しかしこれは、若い人に、車は危ないから乗るなどと言っても、自由に乗りたいたいのを簡単に止められるものではないと同じようなことで、なかなかむずかしいことです。むしろ、運転するなら、安全のため必ず免許証を取り、交通規則をしっかり守ることを約束させると同じように、性交渉にはいつも“ピルもコンドームも”ということ徹底させることの方が、より現実的な指導方針といえましょう。別に放任する訳ではありませんが、

若い人達に、誰のためでもない、自分自身の性の健康を守るために、正しくコンドームを使用する、という予防の原則を、必ず守るようにしてほしいと思っています。

そしてたびたび述べてきましたが、何よりも、この性感染症が、今や、性生活をもつ人なら、誰がかかってもおかしくないほど、性生活の環境汚染的な流行をしているのが現状なのです。お互いに、現在全く性感染症freeであるという保証がない限り、エチケットとしてコンドームを使うことが、パートナーへの“本当の愛のあかし”であると言えますか？ 避妊のためのピルとは関係なく、コンドーム使用は、性交渉時のお互いの愛の思いやり、守るべきルールである訳です。丁度、ピルを飲むことが、免許証を持つことであり、コンドームを使うことが、車の

運転の時に、交通規則を必ず守ることに通ずるのです。平気で赤信号の交差点に突っ込むようなことは、絶対に避けたいものです。



お互いに性の健康を守るために
正しくコンドームを使用するのがSTD予防の大原則
【愛情や信頼だけではSTD予防はできません】

ピル処方時、自分の為にクラミジアの検査を

最後にもう一つだけ付け加えたいことがあります。

ここまで説明して来たように、無自覚のうちに無症候の性感染症、ことにクラミジアに感染している可能性は、性生活をもつ若い人達にはかなり高いのです。ことに性生活が活発で、パートナーの多かった人は、4~5人に1人くらいというほど、極めて危険なのです。

その、気づかないクラミジア感染を放置しておく、骨盤内感染症になり、いろいろ問題を起こし、また“不妊症”に数年のうちになる可能性もあるのです。またさらに“エイズにも3倍も4倍も罹りやすく”なっていることも忘れてはなりません。

そのため、男性にくらべてクラミジア感染率のかなり高い性生活を持っている若い女性の人達は、自ら進んで、定期的に検査を受けてもらいたいと思っています。誰のためでもなく、すべて自分のためである訳です。感染が発見出来れば早く治療が出来、将来悲しい合併症に苦しむこともなくなります。ま

た、知らないで自分の感染をパートナーに移すこともなくなり、社会的責任ある人間としての自覚をもつ必要もありましょう。

しかし、何も自覚症状がなく、健康だと信じている若い人達が、わざわざ時間を作って検査に病院へ行くことは、たとえ頭で理解していたとしても、実際になかなか無理な話といえましょう。

ただ、どうしても医者に行きたくなくても、少なくともピルを服用しようとする女性の場合は、処方してもらいに医師を訪れることになります。性生活を持っていることは、感染の可能性の高い生活をしているとも言えます。そこでピル服用のために受診する機会を利用し、自分からクラミジアなどの検査を受けてもらいたいです。ことに前にも説明しましたが、クラミジアは女性が男性より2.3倍も罹患率が高く、しかも若い人達では特に女性優位の感染症になっていることを覚えておいて下さい。

欧米の先進国では、少なくとも24歳以下の女性は

受診時には定期的に検診するように、国の公衆衛生機関からのガイドラインに出ていますし、最近では30歳以下まで広げるようにもなりつつあります。そして先進国の女性も、皆検診は当然のこのように思っているとのことです。

ただ女性にとって、何も異常はないと思っているのに、検診台に上るような検査は耐えられない、という人が殆どでしょう。そのため最近では下図のように、簡単にタンポンを入れるように、自分で綿棒を性器に入れるだけで充分検査出来る、優れた方法が普及しています。もちろん、そのような簡単な検査でも、しっかりクラミジアを検出できる高感度の検査キット（PCR、LCR）を使わなければなりません。（なお、それでもいやという人のために、欧米では、かなり検査の精度が落ちますが、尿による検査もあります。しかし、これでは3分の1の人が見落とされますので、綿棒での検査をぜひ受けてほしいものです。）

今や、殆ど不快な思いをしないで検査が出来るのですから、是非ピルをもらう時は、少なくとも1回は検査を受けてください。そしてパートナーが変わったり、複数いる人は、その都度、検査すべきでしょう。

よく費用のことを問題にする人がいますが、さして高額でもないし、何よりも大切な、かけがえのない自分の身体の健康のためであることをよく考えて

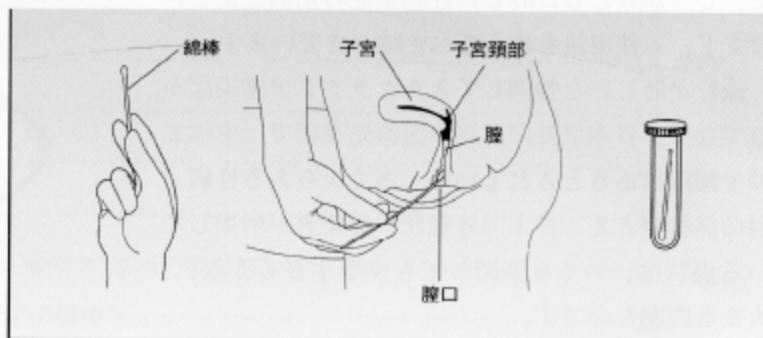
ほしいものです。勿論、ピルを処方する医師側も、積極的に検査をするようにすべきであるといえましょう。

なお、男性側にも当然、同様に積極的に検査を受けるべきだ、との声はかなり聞かれます。しかし女性のように、ピルのために受診する理由のない若い男性に、検査のためだけに医師を訪れさせることは、事実上不可能と言わざるを得ません。女性でもピルという理由がなければ受診したがりませんから……。

そこで、少なくとも女性側が無自覚のうちにクラミジア感染をしていることが診断された時に、そのパートナーにも確実に受診させ、感染していれば一緒に治療するようにすることが、現実的な男性側への検査普及の方法ではないかと思います。他に啓発の方法があり、男性側の積極的な検査意識を高めるようなキャンペーンが出来れば別ですが、現実には大変難しいことです。大流行しているクラミジアの無自覚感染をチェックして、自らの“性の健康”を守り、またエイズ感染の可能性を予防しておくべきであるという考えが普及すれば、そうなると思っていますが……。そのようにしているうちに、男性側も積極的に検査を受けるような風潮が定着してくるのではないかと考えています。

本当は、生殖年齢の男女は、その性生活の内容に応じて、定期的に検査を受けるべきでしょう。

クラミジア自己検査キット



自分で膣の入口をこするだけで簡単に検体がとれるので、検査に嫌な思いをしなくてもすむようになっています

憂うべき日本の性感染症大流行の現状を考えよう

現在の学校での性教育では、男と女の性が、医学的に（解剖学的・生理学的）どのようなものであるかとか、“性の光の表”の部分についてはかなり詳しく教えても、この本で述べている、性行為にまつわる“裏や影”の問題について、殆ど教えられていません。当然、その“予防につながるコンドーム使用法”などについては、極めて不十分なことしか説明されておられません。

たとえば、エイズも性感染症としての話より、被害エイズや人権問題に力点をおかれています。また、今大流行している性感染症のクラミジアなどは、高校3年生においてさえ、名前を知っているだけでも僅か1割にとどまっているという教育内容です。半分近く性経験をもっている状況にある高校3年生でも、クラミジアについて知っているのは5%くらいしかいません。

性感染症の恐ろしさ、また、無防備での性交渉で皆がすぐに感染する可能性が高いことなど、殆どが知られておらず、若い人達が性感染症をあまり心配していないのも不思議ではない現状なのです。

是非、若い人達が性感染症についての知識を深めて、その恐さを知り、予防の必要性を充分理解してほしいと願っています。教育関係者やPTAの方々が、危機感を持つべきではないでしょうか。教育の現場で、しっかりとした詳しい性感染症の知識と正しいコンドーム使用法を教えるべき時がきています。

流行が著しいと強調してきたクラミジア感染ばかりでなく、日本以外の世界の医療先進国で、すべて減少傾向にあるとされている、古くからある性病・淋菌感染症さえ、日本では現在、感染者が増加している現状は、いくら強調しても少なすぎるくらい、大変な問題なのです。

これは、国をあげての性感染症への“あきらめるばかりの危機感のなさ”の結果なのです。この性感染症の大流行の波に乗って、エイズが大きく広がる可能性はかなりあるわけです。国際的な常識として、はっきりと淋菌やクラミジアの感染流行を抑えることが、すなわち、エイズ流行予防対策であるとされています。そのことから考えると、日本の現状は、エイズ流行拡大の可能性を秘めた、かなり危険な状況にあると言ってよいのです。

是非、このパンフレットを読んだ人達が、その点を考えた上で、自らの性感染症の予防を、すなわち、正しいコンドーム使用を心がけ、予防対策を常に実行してもらいたいものと願っています。



<現代は四猿時代>